

## 「チェコへの扉ー子どもの本の世界」 関連講演会「チェコの子どもと読書」

平成 20 年 4 月 26 日

講師：ペトル・ホリー

本日は私のためにこんなにお集まりいただき誠にありがとうございます。先ほどすごく立派な紹介をいただきました。私は 1972 年生まれなのでまだ先生と呼ばれる立場にはおりませんので、もうホリーで結構です。よろしく願いいたします。

先ほど谷中に住んでいたとご紹介をいただきましたが、実は谷中の前に所沢に 1 年おりました。ここに所沢周辺の方々、遠くからおいでいただいた方、私が日頃お世話になっている方々もお越しくさっています。本当に感謝の気持ちで一杯です。個人的な話で恐縮ですけれども、私は日本に来て今年で 10 年で、いろいろな方から何から何までお世話になり、お力添えをしていただいたおかげで今の私があります。

今日は面白い話になるかどうか心配しております。私が話している間、ご質問等ございましたら是非お手を上げていただいて、お聞きになっていただけたら私も助かります。というわけです、ホリーでございます。

### **チェコ共和国の紹介**

本日は、「チェコの子どもと読書」ということでお話しさせていただきます。お外の方はちょっと憂鬱な天気が続いていますので、できるだけ楽しい話をしようかと思っています。しかし、チェコにお越しいただいたことのない方もいらっしゃるかと思いますので、まずチェコのことを本当に簡単ではございますが、説明いたします。そして本の世界に入らせていただきたいと思います。

チェコ共和国大使館のチェコセンターというものが 2 年ほど前にできまして、私はそのチェコセンターに勤めております。まず国の名前はチェコ共和国といいます。もともとチェコスロヴァキアという名前で行われている国ですけれども、1993 年にスロヴァキアと分かれました。非常にスムーズな、戦いのない分かれ方でしたのでよかったですけれど、1993 年の元旦をもちまして、チェコ共和国となったわけです。この国はまた、2004 年から EU 諸国に加盟いたしまして、ヨーロッパの中で EU の国の一つとして現在に至ります。面積は 78,864 平方キロメートルです。北海道とほぼ同じなので非常に国土の小さい、小規模な国であります。

隣国としてドイツ、ポーランド、オーストリア、スロヴァキア等がありますけど、やはりここからいってちょうど西と東の狭間にある国ですので、歴史を振り返ってみますといろいろなことがありました。どこの国でもそうですが、チェコの場合は特に 20 世紀後半、

西と東のいろいろな問題がありまして政治的なこともそうです。ちょうど今年は 40 年が経ちますが、ご存じの 1968 年、「プラハの春」が起こりまして 8 月 21 日に、当時ワルシャワ条約機構軍がチェコに侵入して、大変な惨事を及ぼしたわけでございます。こういった政治的なことがいろいろありまして、知性の持ち主は、国を亡命することを余儀なくされてどんどんと国を離れて、今、世界で活躍しているわけです。

ということは、1989 年に一応国は自由化されましたが、こういった 1968 年に、つまり 1989 年より 21 年も前に、大変な目にあって亡命した人たちはそのほとんどは外国で活躍しています。たとえば作家でいうと有名なミラン・クンデラ、『存在の耐えられない軽さ』を書いた人はもともとチェコ生まれです。映画でいいますと、ミロシュ・フォルマン、英語読みでミロス・フォアマンという人がモーツァルトに捧げて、『アマデウス』という映画を撮っているので、彼もこういった亡命者から生まれた一人でございます。

話は全然違うところに行ってしまいましたが、人口は 1,030 万人ほどおります。ということは東京より少ないのではと思います。首都はご存じの方も多いかと思いますが、プラハでございます。これは面白い話の一つですが、ヨーロッパのどこに行ってもプラハのことをプラハと呼んでくれる国はありません。ということは、ドイツ語ではプラーク、英語ではプラーク、ロシア語ではプラークです。9 千キロも離れている日本では、プラハのことはプラハ、と呼ばれていることは、チェコ人として、大使館の一員として非常に嬉しいことでございます。お礼を申し上げたいと思います。

公用語はチェコ語です。インド・ヨーロッパ語族の西スラヴ語群というのですが、どんな言葉かという、やはりポーランド語ですとか、ロシア語に似て、5 つも、ちょっと独特で、難しい話はいたしませんけど、変化活用というおそろしい文法の地獄があります。名詞は七変化といいまして、7 回語尾が変わるのです。たとえばどういうことかといいますと、プラハというのがありまして、原型だとしましょう。日本語に助詞がありますね、「プラハの」「プラハに」「プラハで」「プラハを」とか、そういう助詞はチェコ語にはなくて、この場合、名詞の、固有名詞の語尾を変えることによって助詞の役割を表します。ですから、たとえば「プラハに行きます」というときは「なんたらかんたらプラハ」になるのです。チェコ語は言葉自体が変わってしまいます。

それから時間帯ですが、チェコというのはヨーロッパのど真ん中に位置するということなので中央ヨーロッパです。よく東欧といわれますが、東欧という言い方はやはり戦後のものでございます。つまりもともと 40 年間共産圏に属していたので、東欧と呼ばれるようになったのですが、ただ地図を見ると、たとえばウィーンの方はプラハよりはるか東にあるのです。オーストリアはどちらかという東欧でも西欧でもなくて中欧なので、チェコも中欧という言い方に戻したいなあと考えております。また日本との時差は 7 時間、これは夏時間です。また第二次世界大戦から時間制は 2 つありまして、冬時間のときは 8 時間なのです。まだチェコは朝だと思います。

## ●チェコ絵本の小史

### 『世界図絵』

では次に行きたいと思います。私は「チェコ絵本の小史」と名付けましたが、絵本というより児童書です。その中で最初にお話ししたいのは、大変な教育者、思想家であったヤン・アーモス・コメンスキーです。ラテン語ではコメニウスと言うのです。彼は当時のチェコで活躍しました。また 15、6 世紀というのはチェコにとって大変な歴史的な事件が次から次へと勃発しています。たとえば 1618 年辺りから三十年戦争が起こりました。どういふことかといいますと、難しい話はいたしません、チェコはそのときまでプロテスタントの国だったわけです。ハプスブルク家の影響がだんだん強くなって、ハプスブルク家はどちらかというとカトリックなのです。そのカトリックはとても嫌で、町の人は何をしたかという、カトリックの人たちを窓から突き落としました。プラハ城で、窓外放出事件が起こりまして、それをきっかけに三十年戦争が勃発したわけです。それが、コメニウスとどういう関係があるのかという、コメニウスというのは、インテリでプロテスタントでした。こういう状況になりますと、やはりカトリックから異教徒と思われたプロテスタントの人たちは国を亡命せざるを得ない状態が続いて、その一人がコメニウスだったので

す。

いよいよ本題に入りますが、彼は何をしたかという、今から 350 年前に実はヨーロッパで、そして世界で初めて教科書というものを作ったと言われております。その教科書は、日本語版も 1988 年、1995 年にそれぞれ出版されていますが、彼は『世界図絵』という辞典、図を使った説明の本を書いているのです。絵を一杯入れて簡単な説明がなされていますが、冒頭からこちらのものを引用させていただきました。こちらは井ノ口先生の翻訳で、コンピューターを使って書いたのは私ですから、もしかしたら誤植があるかもしれません。

教師と生徒の対話があるのですが、簡単に読みますと、

教師：こちらへおいで、かしこくなるには勉強しなければならないよ！

生徒：かしこくなるとはどんなことですか？

教師：必要なすべてのことを正しく理解し、正しく行い、正しく語ることだよ。

生徒：誰がそれを教えて下さるのでしょうか？

教師：私が神の助けによってだよ。

当時は、もちろん教育すべては宗教の下で行われていましたので、文章の中にもやたらと神様が出てきます。

生徒：どんなふうにしてなの？

教師：私があらゆる事物を通して導いてあげよう。私はすべてのことをお前に示して、これらの名前を教えてあげよう。

生徒：わかりました。ここにいる私を神の名の下に導いて下さい。

教師：まずお前は簡単な発音を学ばなくてはならないよ。人間が話すのはそれによるのだし、生物も声の出し方を知っている。

そしてお前の舌はそれのまねをすることができるし、手は描くことができるだろう。その後私達は世界の中へ進み、あらゆる事物を観察するだろう。

『世界図絵』（J.A.コメニウス著 井ノ口淳三訳 平凡社 1995）

というような文章でもってこの『世界図絵』が開幕されていますが、非常に面白い本です。日本語訳もあります。最近は平凡社さんの文庫本でもありますので、のぞいてみてください。非常にやさしくて、物事を難しく教える本ではないのですが、それが最初のチェコの絵本だと言われております。しかし先ほど申し上げましたように、この本は1658年に出ました。コメニウスは既に外国に亡命し、いろいろな国にいましたが、最後はオランダのナールデンにいたわけです。この本もチェコではなく外国で出版されて、当時の公用語というのはラテン語なので、もともとはラテン語で書かれています。

#### **民族復興期**

19世紀のチェコですが、まずそれもおさらいになります。オーストリア・ハンガリー二重帝国の土地だったのです。というのは、1620年に、ビーラー・ホラ、直訳して白い山という滑らかな丘があり、戦いがありました。しかし負けてしまうのです。どんどんハプスブルク家の影響が強まりました。そして17、18、19世紀は続くのです。どちらかといいますと、江戸時代のような歴史を持っていて、300年にわたってハプスブルク家の影響がありました。また、国の言葉としてチェコ語というのは抹消されることはなかったのですが、インテリや国の機関で働いている人はドイツ語でないとお勤めできない、という状態が続いていまして、チェコ語もどんどん墮落のような傾向にあったわけです。

19世紀、ちょうど日本でいう江戸後期、何が起こるかということ、民族復興期というものがあります。要するに、もちろんチェコだけではなくて、ほかの国々もそうですが、大きなオーストリア・ハンガリー二重帝国はいろいろな民族が共存していて、一緒に住んでいました。しかしスラヴ系の人、たとえばスラヴ系スロヴァキア人、南は昔のユーゴスラビア（それも結局20世紀に民族という問題のもと戦争が起こりました）まで、私たちはドイツ人ではないのにどうして自分の言葉を忘れられようかということで、民族復興が起こりました。そこでチェコの場合はチェコ語、チェコ民族文化の再興が行われるのです。

当時の本とかを見ますと、ださいなあという本もありますが、しかしどうしても自分たちはスラヴ人だという気持ちがあったのです。そして有名な、絵描きというか、イラストレーターが次から次へと出てきます。そこで、皆様ご存じの方も多いかと思いますが、一人はミコラーシュ・アレシュという名をここで挙げたいと思います。出展はされていますよね。ミコラーシュ・アレシュのイラストの本もせっかく国際子ども図書館で2冊（No.44, No.47）展示していただいていますので、ご覧いただければと思います。

それから、その復興運動が 19 世紀にありまして、後に 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、イギリスで起こった美術工芸運動である、アーツ・アンド・クラフツ運動というのがありました。それが後にチェコにも、当時のヨーロッパにも、ものすごく影響を及ぼすわけです。今でいうブックデザイナーという言い方がありますが、装丁屋さんですかね、文字、印刷、装丁そのもの、挿絵など、いろいろ革命がありました。後にアール・ヌーヴォー、または近代デザインに大きな影響を与えるわけなのです。

### **芸術的な本、児童書**

先ほど申し上げましたように、チェコだけではなくて、ヨーロッパ各国、美装版・愛蔵版が次から次へと出版されるようになります。それだけではなくて、普通の人は立派な本は買えないわけですが、大量部数の普及書まで影響を与えられるわけです。それから若者の芸術教育、児童文学の水準がどんどん上がります。普通の本でもできるだけきれいな装丁、デザインを使っています。108 年前の本ですか、見るとものすごく美しい、紙の質も良いのです。個人的に一番びっくりするのは、古本屋がプラハにたくさんあるのですが、行くと、100 年くらい経ってもなぜこんなにきれいに残っているのだろうということ。値段も最近ではチェコも EU ということで物価が高くなっていますが、まだまだ良い本、立派な本があるなあと思います。

それと密接な関係にあるものだと思うのですが、私はチェコ生まれチェコ育ち、客観的には見ることはできないかもしれませんが、チェコの人は本が好きです。子どもの頃を思い出せば（ついこの間と言いたいのですがあつという間です）、クリスマスになると、大体プレゼントは本、絵本が多かったです。昆虫辞典とか、男性ですから仕方がないですが、そういうのばかりです。誕生日を迎えるときに本をあげるという習慣は、チェコにはまだまだ強く根付いています。後ほどお話しますが、最近もまたチェコの装丁デザインというのは、どんどんとお金をかけて、出版社は苦勞してでも良い本を出したいというのがあります。チェコ人の本への愛着が非常に強うかがわれます。

それから歴史の話に戻りますと、分離派ですとか、象徴主義、アール・ヌーヴォー、古典的な芸術様式が拒否されることになるのです。また本はどこへと歩いていくのかというと、やはりキュビズム、表現主義、場合によって未来派への移行がうかがわれるわけ。挿絵、または本、すべては芸術的なレベルに高められます。もちろんチェコ、ヨーロッパだけではなくて、やはり大正期の日本を見ますと、もう立派な本が一杯ありまして、それは日本に来て非常にびっくりいたしました。大正、昭和初期ですか、本当に美しい本が一杯あります。今の日本、チェコに限らず、今の本を作っている人はいろいろ学ばなければならないところもあるのではないかと考えております。もちろんそれぞれの時代にスタイル、流行はあります。しかし昔、80 年前ですか、捨てたものじゃないというふうに私は思います。

それからチェコの場合は挿絵です。イラストの作家として誰が活躍していたかということ、一流の画家、または彫刻家なのです。たとえばご存じのアルフォンス・ミュシャ、実はチ

エコ語でムハといいます。ミュシャというのは、ついこの間上野の東京都美術館で大きな展覧会が行われました。ミュシャもまたフランス人と思われる方が多いと思います。実はチェコ生まれの画家で、フランスへ渡って、そこでサラ・ベルナールという絶世の美女と称された、女優さんのポスターを描くことによって有名になった人です。こういったミュシャですとか、あと幾何学的抽象絵画の先駆者といわれているクプカという人、彫刻家であるシャロウンという人、プラハにお越しいただいた方はご存じかと思うのですが、プラハの旧市街広場という古くて美しい広場があります。そのど真ん中にヤン・フスの銅像がありまして、それを作った人なのです。それからもう一人、プライシク、たまにプライシクという読み方もあります。一流の画家が本のイラスト、子どもの本、児童書のイラストにもかかわっていて、当時の本はとてもすばらしいと思います。

またおさらいですがお話ししたいことは、プラハというのは冒頭に申し上げましたように、いにしえからいくつもの大きな文化の交差点となっております。それは西と東、それからもう一つ忘れてはならないことは、その民族です。チェコ人、ドイツ人、それからユダヤ人です。チェコ、ドイツ、ユダヤという文化が混ぜられて、いろいろなものが輩出されていくわけです。カフカ、ご存じの方も多いかと思います。彼はもちろんプラハ生まれですが、こういった文化を生み出した一人なのです。

### **第一共和国時代**

芸術に対するこだわりというものが、昔からプラハに限らずありました。プラハの場合は、1885年にプラハ美術工芸学校が設立されました。それは後に（戦後ですけれども）、1946年にプラハ美術工芸大学に改名されます。私が言いたいことは、既にチェコスロヴァキア共和国が独立した1918年の1年後に、プラハ美術工芸学校において実用グラフィック工房が開設されるわけです。つまり大学レベルで、こういった本を作りたいという人は、学ぶことができるというのも、ヨーロッパの中で非常に早い例の一つだと言われております。

ここでお気付きかと思うのですが、チェコスロヴァキア共和国の独立とはどういうことかということ、もともとチェコとスロヴァキアは一緒ではなかった、ということがここで分かっていたかだと思います。ほとんどの方はチェコスロヴァキアとおっしゃるのですが、もともとは別々の国で、スロヴァキアはどちらかというとハンガリーの影響が強く、チェコはドイツの影響が強かったといわれております。余談でございました。

この頃、1920年代からご存じのヨゼフ・ラダですとか、カレル・チャペックのお兄さんであったヨゼフ・チャペック、それから『ありのフェルダの本』などで有名なオンドジェイ・セコラが活躍し始めるわけです。みんなとても若くて、それぞれスタイルは違いました。ヨゼフ・チャペックは、『こいぬとこねこはゆかいななかま：なかよしのふたりがどんなおもしろいことをしたか』という、かわいいイラストを描いていると同時に、とても斬新なキュビズムに近い絵を描いています。また当時は、アヴァンギャルド運動というのは非常に強かったのですが、アヴァンギャルドとも一風変わった画風を持っていました。あ

いにく、第二次世界大戦になりまして、彼は大変な圧力をかけられたうえで、強制収容所で亡くなっているわけでございまして、いまだに何月何日亡くなったかということは定かではありません。

その彼の弟、カレル・チャペックは 1920 年、直訳して人造人間、『ロボット：R.U.R.』という戯曲を書きまして、そこで初めてロボットという言葉を使います。皆様ご存じのロボットという言葉もチェコ語、造語ですが、チャペック兄弟が生み出した言葉です。これが世界へとはばたき、全世界的にロボットが広まり、今、日本が最先端にいるかと思えます。しかしロボットのふるさとはもともとチェコでございます。余談でございました。

ラダ、チャペック、セコラについては、皆様詳しい方はたくさんいらっしゃるわけですが、日本では知られていないイラストレーターも、実は山ほどいるのです。チェコでも既に忘れ去られているイラストレーターはおりまして、彼らについて後半の方にいろいろとお話したいと思えます。もう一つ、個人的に好きな冒険、SF 文学というテーマで、またご存じのズデニェク・ブリアン、『マンモスの狩人』を描いた人ですが、活躍しています。それからオタカル・シュターフル、日本ではもちろん、チェコでも今では知っている人はほとんどいない偉大な絵描きがいました。また後ほど実際に絵をお見せしたいと思えます。

#### **女流画家トワイアン（本名 マリエ・テルミーノヴァー）**

それから戦前の歴史なのですが、もう一つ忘れてはならないテーマはやはりチェコのシュルレアリスム、超現実主義です。皆様ご存じのヤン・シュヴァンクマイエル、彼は最近毎年のように来日して、映画制作の指導をしております。映像作家であり、またはオブジェもいろいろ作って、絵を描いたり、コラージュ、その他もろもろ活動したりしている方なのです。彼の背景にチェコのシュルレアリスムグループがおります。ヨーロッパではフランスに次いで、非常に早いときにプラハで結成されました。チェコではヴィーチェスラフ・ネズヴァル、それから女流画家のトワイアン（これはペンネームです）、それからシュティルスキーなどを挙げたいと思っております。トワイアンの絵を見ながらいろいろお話を進めたいと思えます。

難しい話はこれまでにして、絵を見ながらお話しします。実は先ほど打合せのときに、何をしゃべって良いかよく分かりません、と言いましたら、時間はどんどん押すと言われました。しゃべりすぎかもしれません。チェコセンターの場所は、最後に言いますのでいらしてください。日赤通りにございますので。

これからいよいよ絵の方に移りたいと思うのですけれども、これは平凡社が出した井ノ口先生の翻訳で『世界図絵』の本ですので、立ち読みでも結構ですので、見てください。

トワイアンは女流画家であり、一生男性の服を着て、それで非常に話題になっていました。彼女は第二次世界大戦のときにずっと友達であった、シュルレアリスムグループの人たちをかくまって助けました。ご存じのように 1948 年にチェコでは共産党のクーデターがあり、国全体は共産圏に入りました。そのときに彼女も亡命を余儀なくされてフランスへと亡命して、1980 年にフランスで亡くなっています。

とても立派な、まじめな大人向けの絵と同時に、実は児童書のイラストも描いているわけです。こちらは直訳して「全世界からのゆかいなおとぎ話」という題名の本です。これは1930年代のもので、ちょっと落書きが入っていますが、古本屋で見つけた時は嬉しくて仕方がなかったのです。彼女はペン画も描いています。線ははっきりとしていて、児童書のイラストといっても、非常にまじめというカリアル、ちょっとかわいくない、怖いと思われる方もいらっしゃるかもしれません。しかし非常に魅了される絵でございます。これは、実は大きなものは卵なのですが、ちょうど1か月前のイースターエッグなのです。子どもたちがそのショーウィンドウを見ている場面です。こちら分かりますか、「全世界のおとぎ話」ですので、サルがいて、下はクモに見えるのですがカニだそうです。ですから『さるかに合戦』の翻訳が一つ入っているのです。こういう絵も描いています。

次は、こちらにもトワイアンです。チェコのシュルレアリスム文学の巨匠とも言われているヴィーチェスラフ・ネズヴァルが書いた小人の話です。アニチカ、チェコ語で、“*Anička skřítek a Slaměný Hubert : kniha pro děti*” (妖精アニチカと麦わら帽子のフベルト) という題名の難しい本で、ぱっと見たらトワイアンだと分かるのです。こちらは表紙です。内容はおとぎ話で、すごくシュールというか訳が分からないのです。要するに、ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』ですとか、『鏡の国のアリス』です。ああいうようなキャロルはシュルレアリストにとって大変な資料の源、題材の源でもありましたので、非常に似ているところがある本でございます。こちらは、その本を開いて、遊びですかね、こんなイラストがあります。こういうものまであるのです。いかにもシュルレアリスム、こちらは子ども向けの本です。こういう本当に、子どもに見せて良いかどうか、というようなのは、チェコの場合だけではないと思いますが、子どもか大人か、果たして境界線があるのかしら、というようなことなのです。これはつい立みたいなの、迷路になっています。

今、オークションでいくらお金を出しても買えないというトワイアンの一番の名作は、直訳して「われわれの世界」という教育の本です。作家はマルチャノヴァーという人、絵はトワイアンです。当時チェコというのは、ヨーロッパで非常に経済国の位置にあったわけですので、新しい車ですとか、ラジオ、電車、それから飛行船、飛行機までありました。1930年代の当時を、子ども対象に紹介する本です。絵は何とも言えない、妖艶と言ったら変ですが、そういった絵に多くの方が魅了されています。

### **オタカル・シュターフル**

先ほど申し上げましたようにオンドジェイ・セコラという人は『ありのフェルダの本』で有名になりました。実はセコラの前に、オタカル・シュターフルという人が昆虫または動物を使って、世界の<sup>ことわり</sup>理<sup>ことわり</sup>または学術的なことまで紹介する本にイラストを付けているのです。ここではカラスと下の方に余りよく見えませんが、ハリネズミが座っています。シュターフルの絵は一杯あります。テーマがそれぞれあり、こちらの“Hory”というのは山、山脈です。“Z Přírody”というのは「自然から」という題名で、こちらは山の動物、昆虫を使って冒険物語を紹介する本なのです。1920年代ですから、大正、昭和初期に入る



直前の頃の本なので、チェコではシュターフルの本を知っている人は本当に少ないです。専門的に扱っている人以外、一般人はほとんど忘れています。

こちらにも非常に印象的な挿絵です。これは表紙で森の話です。下の方にプラハ、1922年とあり、本の状態がすごく良いのです。表紙と挿絵にも当時の最高級の紙が使われていて、本当に立派な本ですが、別に当時としては高くはなかったのです。先ほど申し上げた大量部数の普及書というもので、児童書なのですがイラストは一つ一つ丁寧に描かれています。これをよく見ると、錬金術師の実験室みたいな、真ん中に蝶々なのですが、たて襟みたいなものがあります。ですからプラハでいうと、ルドルフ2世ですから、16、17世紀の錬金術が流行したので、そこからヒントを得てこういうものを描いているのではないかと思います。皆様の方から見て右の方に試験管とかいろいろ置いてありますので、実験中のような感じです。こういう、雨が降ってきたら、ベニテングタケがあずまやになってしまっていて、そこで雨が過ぎ去るのを待っているのです。

個人的にすごく好きな本ですが、これは「月への飛翔」ということで、こちらにも1920年代の本なのです。昆虫を使って月に行きたい場合にはどうすれば良いか、一体何が必要なのかということ子どもたちに説明しています。本を開いて見ると、各ページではないのですが、2、3枚に必ず1か所に注釈があって、学術的な記述がなされているのです。未来派とは言えないかもしれませんが、ロケット、飛行機というか昆虫の形をしています。大きいのはクモだそうです。左側の赤いのを着た、こちらはノミで、こちらは蚊。先ほどセコラの話をしました。どちらかというカートゥーン風の絵、当時はディズニーが世に出ていますので、非常に様式化された動物または昆虫が描かれていました。こちらは、多分忘れ去られた理由は、あまりにもリアルでかわいいというところがないからかもしれません。ただ私は好きです。こういう場面ですとか、こちらにも、いろいろな本から抜粋していますが、本当に絵は一枚一枚美しいというより怪しい点があります。しかし色使い、曲線の美しさがうかがわれます。また先ほど出た不思議な飛行機、宇宙船です。

こちらは”Potok”(小川)という本です。Potokというのは小さい川という意味でこちらは水中の場面です。”Les”というのは森です。ズデニェク・ミレルのもぐらのこと、皆様ご存じかと思いますが、本来あるべき姿のもぐらなのです。ミレルさんも元気ですよ。1921年2月21日生まれですので、ということは87歳を迎えられて元気です。で、こちらはまたベニテングタケです。この本”Komár dělá vědu”のタイトルを直訳すると、「学術的な仕事をする蚊」、Komárというのは蚊、Komárが学者になった話です。こういうまた試験管がいろいろありまして、爆発です。こういう場面で、また爆発で、非常に残酷です。昆虫の破片がこう・・・、これも子どもの本です。

チェコの本はよくイラスト、テキストが一杯入っていますが、やはり親が子どもに読み聞かせるという本が一杯あります。私も祖父、祖母によく本を読んでもらった覚えがありますが、いつのまにか寝てしまっているのです(そのときにいつも本は落ちてしまって、字が読めないときよく絵を見ていた覚えがあるのですけど)。また同じような場面で、”Bojo

les”「森の戦い」などがあります。

ここでもう一つ、実はシュターフルと切っても切れない関係の話なのですが、実はチェコと日本の関係に大変な貢献をしている人なのです。彼は子ども向けのSF、冒険文学の挿絵を描いている一方、東洋、それから日本のおとぎ話を翻訳したときの挿絵も描いています。明治時代からヨーロッパ、またはアメリカに日本の浮世絵が大量に渡っていますが、チェコ人ももちろん浮世絵、または刷り物に魅了された人が多く、また画家もいろいろと影響されているわけです。シュターフルはその一人なのです。こちら“Denník malé Ti-ca”は1919年ですから、ちょうどチェコスロヴァキアができて1年後ですが、シュターフルが発表している本のカバーです。カバーを取ると、椿でしょうか。日本画からもちろん脚色されていますが、そこはまたチェコ人が自分なりに脚色しようというのがよく見られます。

こちらは本を開いた状態の絵です。千鳥模様みたいなものがありまして、これはもう明らかに日本の浮世絵からとったモチーフです。当時は歌川国芳、歌川国貞ですとか、チェコの場合はどういうわけか、上方の、要するに大阪の絵がプラハのギャラリー、当時は美術館によって集められていたようです。明治時代からチェコ人は割と多く日本に渡っていますので、数年住んで、当時浮世絵は安いということだったので大量に買っておみやげのようにばらまくのです。

こちらは個人的に好きな著者の一人で、ヨエ・フロウハという人です。次から次へと、数え切れないくらい本を出して、1920年代、30年代から日本をいろいろと紹介してきました。彼が書いたものを、直訳すると「恐怖のあずまや」(“Pavilon Hrůzy”)、Pavilonはあずまやで、Hrůzyというのは恐怖という意味です。要するに日本の怪談集をフロウハが出して、シュターフルがイラストを描いているのです。それを開くと、「すみは餓鬼にすらせ、筆ハおににとらせよ」という motto が描かれています。この絵も字はちょっと定かではないのですが、シュターフルが書いています。多分思うには誰かが書いたのを転載したのではと思うのですが、絵は朝顔があり、いろいろとまたこの立派なペン画でございまして、こちらは1920年に出た本なのです。

これはちょっとおどろおどろしい場面です。1920年、この本で初めてチェコで日本の『四谷怪談』、お岩様のお話が紹介されまして、こちらはそのイラストなのです。ちょっとまだ夏になっていませんが、下の方に髪すきをした後のお岩様の惨めな姿があります。上はどうも伊右衛門さん、お芝居とはちょっと違うようです。こちらはお岩様の幽霊姿です。シュターフルが想像した幽霊姿、足があるかどうかは定かではないです(あるような、ないような)。面白いのは、頭巾ではないようですが何かかぶっています。髪の毛が抜けているから恥ずかしいかもしれないということで、シュターフルの脚色なのです。ここで10分間休憩です。

#### **日本でのチェコ建築家の活躍**

続きをさっとやりますので、よろしく願いいたします。先ほどチェコでの本、出版物による日本の紹介のされ方について、少しだけお話しさせていただきましたが、一つに、

実はチェコ人の中で、明治、大正、昭和初期に日本の地を踏んだ女性もいたのです。

その前にチェコと日本とのかかわりなのですが、実は意外なことに建築家が多くチェコから日本に渡って、いろいろと造っていました。それは直接本の話と関係ありませんが、おさらいというつもりでお話しします。一番有名だとされているのはヤン・レツルという人で彼は何を作ったかという、今でいう広島原爆ドーム、もともと広島県物産陳列館、または産業奨励館ともいわれた建物を 1915 年に彼が作りまして、第二次世界大戦のときにあいにくああいいう惨事になってしまいました。今は世界遺産として登録されている建物は、チェコ人の建築家であるレツルによるものです。

それからもう一人、アントニン・レーモンドという人がいまして、彼はフランク・ロイド・ライトという世界的に有名な建築家に招かれて日本に渡って、今はその本来の姿を消した帝国ホテルを建築しました。また聖路加国際病院もレーモンドによるものです。実は聖路加国際病院の関係で面白い話ですが、レーモンドはほかのチェコ人も日本に招いて一緒に造っているのです。たとえばベドリッヒ・フォイエルシュタイン（難しい名前の人なのですが）はその一人なのです。フォイエルシュタインは日本に来るまでに何をしていたかという、実は舞台装置家、舞台美術の仕事もしていました。なんとカレル・チャペックの戯曲であった人造人間、先ほど申し上げましたロボットという言葉が初めて響いた、『ロボット：R.U.R.』の戯曲の初演の舞台を造っているわけなのです。ですから、またチェコの演劇にとっても非常に重要な人物なのです。

もう一人、建築家がいまして、その人はヤン・ヨセフ・シュワグル、当時の日本人はスワガーと呼んでいました。シュワグル、レーモンド、フォイエルシュタインの三人で、いろいろと造っています。一番興味深いのは、横浜に外国人の館が一杯並んでいますが、そこに山手カトリック教会があります。1930 年代に作られたシュワグルの作品です。教会に入ってくださいますと祭壇がありまして、それから日本で現存する最古の木造のものと思われる説教台があります。これもまたスワガーが造っているのです。その祭壇と説教台に向かって右側をご覧くださいますと、ステンドグラスがいくつもあります。その一枚に、なんとモルダウ川とカレル橋、プラハ城がありありと描かれています。ですから横浜にあるリトルチェコなのですが、ちょっと意外な関係があったということなのです。建築のことはまた別の場所で次回にお聞かせしたいと思います。

### **チェコでの日本受容**

今日は本なので、女流作家であり英語の教師でもあった、後に大使館に勤めたエリアーショヴァーという女性がいたのですが、彼女はこういう本をいろいろ出しております。こちらはちょっと読みづらいかもかもしれませんが、先ほど教わりました『家庭週報』という雑誌に出た本人です。エリアーショヴァーですがエリヤスさんと呼ばれ、彼女は当時 2 年間日本に滞在していました。で、なぜ彼女についてお話ししているかという、彼女もやはり日本の昔話、おとぎ話をチェコで紹介しているのです。ということはほかの人もいろいろと紹介していますが、結晶と言える本を後ほどご紹介したいと思います。

その結晶の本というのは、こちらが現物で、1926年に出た和綴じの本でございます。展示会にも出ている（No.208）ようで、本来は手袋をはめて触らないといけないのですが、私の本ですので…。めくってどんな本か、簡単に説明したいと思います。著者はヨエ・フロウハ、ジョー・フロウハとも呼ばれています。原題はチェコ語で“*Pohádky japonských dětí*”（日本の子どもの昔話）といえます。1926年、プラハで出版され、日本の和綴じとは微妙に違うのですが、袋とじになっていてこのような立派な本なのです。「日本の子どもたちは世界で一番幸せだ」というような記述がいろいろとなされています。最初は日本の一般的な情報、あとカラー写真というか彩色付きの写真があって、ひな壇、日露戦争、鯉のぼりなどが紹介されています。あと、やはり孔子の言葉、「親孝行しないとイケません」とか、そういうことがいろいろと書かれています。そしてチェコ語で書かれています、面白いのはこのビラなのです。直訳しますと、「ちょっと例外ともいえる袋とじになっていますので、どうか袋とじをナイフで切らないでください」と書いてあるビラが入っていましたので、買ったときにちょっと嬉しかったです。

こちらは源頼光の話ですが、たまに絵がなかったりしているので、おとぎ話というか伝説です。これはまた立派なのですが、歌川国芳の絵がこう、三枚続きできちんと載せてあります。あと坂田金時、あとこちらの方に山姥です。あと牛若丸ですとか、全部きれいに紹介されて、足長と手長、きつね、たぬきのことですか、本当にいろいろと丁寧に描いてあります。

こちらは、*Pohádky* とはおとぎ話という意味です。タイトルを読みますと、『きちべいときさぶろう』、『ちょうでんす(兆殿司)』、『年号の滝』、4番は『雪女』、5番は『浦島太郎』、それから6番は直訳すると、『食欲のおとなりさん』、『みけんじゃく(眉間尺)』、『ほたるひめ』、『桃太郎』、10番は『ぶんぶく茶釜』、11番は何かよく分からなくて“*Šikaja-Vasobijoje*”（四海屋-和莊兵衛）、あと15番は『舌切り雀』、それぞれありまして、一番後ろに「昔ばなし、保呂宇波編」と書いてあるのです。ちゃんと当て字で、彼はお金をかけてこういう本を作っているのです。

あともう一つ、絵本ではないのですが、本はもう古いので我慢してください。こちらは、“*Obrázky z Žapanu*”。今は日本のことをヤポンスコというのですが、昔はフランス語の影響もあり、ジャポンとかジャポンスコ、ジャパンといっていました、非常に読みづらいです。1904年、ちょうど日露戦争のときに日本を紹介するものです。1冊の本ではなくて、これは何巻にもわたる長編のシリーズで、こちらはその6巻です。要するに若者を対象に日本の今を紹介する本として、非常に盛んだったのです。こういろいろ、こういうものですか、あとはお侍さんです。ただ日本人を描いているわけではありません。エッチングです。富士山の絵があつたりして、日本という国はこうなのですよ、という本なのです。でもこういうものは、もちろんチェコばかりだけではなくヨーロッパ、アメリカなどで多く見られますので、おそらくそういう本から影響を、またはイラストそのままを抜粋して紹介しているのではないかと思います。というちょっと余談でございました。

## 「ネズナーレック」

それから、もうずっと昔のことばかり申し上げていますが、これも表紙からいって新しい本ではないのですが、子どもの頃非常に好きな本でした。ロシアの作家でニコライ・ノーソフという人が書いた本なのですが、面白いのは、イラストはチェコのものなのです。チェコのヤロミール・ザーパルという人が描きました。不思議なことにザーパルという人は、ノーソフの本しか挿絵を付けていないのです。そのほかは何の作品も見当たらない、というちょっと不思議な人なのですが、絵はまた何とも言えない面白い絵なのです。

この本の話の主人公はチェコ語でネズナーレック、とって日本語に直訳すると「もの知らないくん」、「無知くん」といってかわいそうです。彼はいろいろな冒険をするのですが、ちょっとやはり話の内容からいってプロパガンダっぽいところがあります。世界というのは善玉、悪玉があって、善玉は東、悪玉は西、はっきりと冒頭に書いてあるのです。で、善玉はすごく良い世界を作り、西に行けば貧しい人もいるし駄目です。主人公の名前からいっても、「食欲さん」とか直訳っぽい名前が多くて、大体「食欲さん」は西っぽい、というような本なのですが面白いから載せてみました。これは時代で言うと 1961 年です。先ほど、「是非イジー・トゥルンカの話をしてください」とおっしゃった方がいらしたのですが、トゥルンカはもちろん偉大なチェコのイラストレーターであり、アニメーター、アニメ作家であります。しかし今日はもう一つ知られていない世界をご紹介させていただければと思っております。

これはその一場面ですが、月の旅行に向かう準備をしています。そしてこのキャラクターは何だろうと思われるような、ちょっと未来的なものがありますが、気になるのは名前で RADIOLA (ラディオラ) というのです。チェコ語で聞くと何とも不思議な感じがします。太陽が描かれていて、こちらの変な帽子をかぶっているのは「もの知らないくん」、彼のマークは細長い帽子なのです。みんな一寸法師みたいなサイズだから、鳥がやってくるとすごく大きく描かれています。こちらは、実は 3 冊しか出ていないのです。ネズナーレックの話は 3 冊で、一つは先ほどの太陽の巻のネズナーレックと、それから *Neználek na Měsíci* というのは、月のネズナーレックです。月に旅立って、その他もろもろの冒険をしたネズナーレックはあるのですが、こちらの表紙は割ときれいな状態で家に残っていました。これはどちらかというとアニメっぽい、こちらに影がいろいろ描かれています。遠近法というか、ちょっと表面的な絵には見えるかと思いますが、またかわいいと思います。しかも、月のこういう所にいろいろ宝石みたいなものがあるのです。ピラミッドなど、彼らのすばらしい発見もありました。もしかしたら日本語訳はあるかもしれません。(注: 『ネズナイカのぼうけん』(ノーソフ作 福井研介訳 ラープチェフえ 偕成社 1976) など) いろいろと調べてみましたがそこまでは至らなかったのですが、あれば読んでいただきたいです。本当に先ほど申し上げましたようにプロパガンダ的なものが一杯入っていますので、それもまた面白いです。今読めば、子どもに聞かせたくないような記述もあります。

チェコの 60 年代というのは、私はもちろん生まれていませんが、要するにその緩和の時

代というのでしょうか。60年代後半になって、発言自由までには至っていないかもしれませんが、50年代のスターリン主義と違って、表現の自由というのはおそらくあったのではないかと思います。ですから文学の中でも、行間を読めばちょっと面白いところがあるということでこの絵を選びました。ここにプラカードではないのですが、書かれています。チェコ語の MLČET A SLOVŽIT、直訳すると「黙って奉仕する、仕事をする」。これは二面性で、一つは話の中で、彼らは奴隷の立場にあって、黙って仕事すれば良いということと、それから当時のチェコ人はチェコに住んで、やはり幹部というか、当局に対して黙って仕事をすれば良いと、二つの理解の仕方がうかがわれるのです。だからチェコの文学というのは、もちろん検閲はいろいろあったわけですが、たまにこういう検閲をやっている人もどれだけ頭が良いかは定かではないので、こういったものも通したという証拠の一つだと思います。

### チェコ児童書の今

そのチェコの児童書の今ということなのですが、これは2004年に名声を博した、Baobabという出版社がチェコにあります。それをやっているのは夫婦で30代の男女です。毎年、チェコに一番美しい本のコンペティションというのがありまして、最近、彼らは確かにその賞をもらっています。チェコの児童書の今ということで、これは果たしてかわいいかどうかということなのですが、今、私の世代の人はすごく好きです。これは“*Modrý tygr*”, (あおいとら)という本の表紙です。それを開くとこういうシュールな絵になっておどろおどろしい雰囲気なのですが、今、チェコ人はこういうのが好みです。

あと、絵が最後の数枚に迫りましたが、一つご紹介したいのは、チェコ大使館、チェコセンターで去年の1月に開催した展覧会です。フランチšek・スカーラという非常にユニークなアーティストで、彼はもともと絵本作家であり、それから彫刻家でもあります。彼が90年代に出した「ブラスとブラダの大冒険物語」という漫画です。チェコの漫画というものもあるのです。その彼の作品はこちらで、また何とも言えないシュールな世界です。私は別に、一杯探してシュールな世界だけ、というつもりではないのですけれども、どうしてもこれは紹介しておきたいと思います。

彼の作品は非常にユニークで、スカーラという人は何をしたかということ、1993年だと思いますが、実はベネチア・ビエンナーレのチェコの代表だったのです。で、彼は一応招かれて何をしたかということ、プラハからベネチアまで歩きました。それで向こうから「出展作品がまだ届いていないです」、と言われ「道中作りますから」、と言って何をしたかといいますと、道中ずっと旅日記(絵日記なのですが)をつけて、数十枚に及んでそれを展示したわけです。拾ったもので家を作ったりするような、そういう人なのです。ですから彼は自然に対する意識がものすごく強くて、自然には存在していないのかもしれないというものばかりを集めて、本のなかで活用しています。ここにもキノコのいろいろな種類が出てきて、もちろんありもしないキノコなのですが、そこはまた彼の面白いところの一つです。

こういうような漫画で、どういうわけか切り絵を使ったり、いけないところで笑ってしまったりというのは非常にブラックユーモアであり、それもまたチェコの特徴の一つだと思います。ここは吹き出しで、「これは夢かうつつか」というところでいきなり人間が出てきます。フランチšek・スカーラも墓地が好きで、よくしばしば棺桶ですとか、そういうものがやたらと出てきたり、こういうような形で棺桶から骸骨さんが一杯出てきたりしまして、それで本来ありえないことが起こりみんなバイクに乗って殺到して行く、去って行くというような世界を作っています。

ここでもう一つ、2007年1月チェコセンターで、オリジナルでご紹介した本がありますので、ちょっとだけめくらせていただきたいと思います。こちらは英語版です。たまたま手元に英語版しかなかったのでごめんなさい。英語では Cecil、チェコ語では Cilka、ですからチェコセンターで開催させていただいたのは「ツィーレク君冒険物語」の展覧会です。実はこれは何かというと写真漫画なのです。一場面、一場面をカメラで写したわけではなくて、この本を作るために2年かけて撮影されたものです。彼曰く地面を這って動物の視点から撮った、ツィーレクとリーダというペアの物語なのです。

それをめくってみますと、このような場面があります。全部木は本物で、あとは彼が人形を作っています。自然に人形を置くことによって物語を展開させるのです。これはスカーラさんの別荘の窓から見える風景なのですが、また何とも言えない不気味なものです。実は私の夢ですが、日本語でもって日本で出版したいなあと考えています。もしどなたか出版関係の方がいらしたら、チェコセンターで努力したいと思いますのでよろしく願いいたします。非常にチェコでも話題になった本です。

そこに、もちろんいろいろと冒険があります。めくるのが早くて申し訳ないです。こういう山登りのシーンですとか、本当に動いているような感じで、写真漫画としては非常に面白いのではないかと思います。そのリーダ、眼鏡は人間の眼鏡だそうです。あと一枚一枚絵を見ると、非常にリアルなものが写っていて、こちらはしびんだそうです。ぱっと見たら気がつかないのですが、子どもに見せるにはリアルな世界です。しかしそういうところに魅力があるのではないかと思います。こちらはリーダのアパートというかマンションの中です。ホオズキです。不思議なオブジェが出てきます。実はフランチšek・スカーラは、2004年だったかと思うのですが、プラハで一番大きいといわれているギャラリールドルフィヌムで大個展をしました。動員数は45,000人で、100万人いるプラハで話題の一人なのです。

次に、数枚で終わりますが、チェコの漫画といえば忘れてはならないのは、ヤロスラフ・フォグラルという人が書き続けた”Rychlé Šípy”という少年向けの大冒険の漫画です。”Rychlé Šípy”というのは直訳すると「速い矢」、Šípyというのは矢、射る、Rychléというのは速い、という5人組の大冒険です。1960年代から、実はもっと前からあるのですが、60年代は一番盛んで、また1968年にああいふことになってしまい打ちのめされてしまいました。漫画というのは西の文学としてあるべきものではない、ということでした。

そして、チェコではよく言われていたのですが、フォグラルさんは高齢で1907年に生まれ、1999年に亡くなりました。この人はなかなか死なない、だからすごく元気で、というブラックユーモアが彼に対して投げられていました。チェコ人ならば誰もが知っている漫画なのです。正義の漫画です。善玉、悪玉、先ほどのノーソフの「ネズナーレック」と違って、西か東ではなくて団結して悪いことをなくそうということを扱った漫画です。今では切手にまでなっているのです。これはこの間チェコで買った切手のシートです。上は入れ物になっていまして、中に折り畳んで切手が入っておりました。で、こちらは彼らのマークなのです。これもついでですが、こちらラダの名作『兵士シュヴェイクの冒険』です。ラダが書いているまた有名な場面です。切手はもともと8枚で、6枚使ってしまいましたので2枚しか残りませんでした。

最後になりましたが、もちろん言わなければならないチェコの作家は長い行列ができるほどいるかと思うのですけれども、その中の一人でカレル・ゼマンです。ゼマンは『クラバート』ですとか、日本では全部アニメで紹介されています。『悪魔の発明』ですとか、そういったものを50年代で撮って、全世界を驚かせたといわれるカレル・ゼマンなのです。その名作で、オトフリート・プロイスラーというドイツ人が書いた『クラバート』をお読みになった方もいらっしゃると思いますが、絵を映画にしたのはカレル・ゼマンです。こちらは、4、5年前ですが、チェコ語で話はプロイスラーで、絵は、実はゼマンは亡くなっていますので、映画が作られた当時、絵を担当していたゼマンの娘さんで、ルドミラ・ゼマノヴァー（結局70年代にカナダに亡命しました）が作った本なのです。

非常にまたどこか不気味ではありますが、とても心を温かくしてくれるお話です。日本語訳も出ていますので是非読んでみてください。出版社は言いませんけれども、何回読んでも泣きたくなるような美しい話で、時期は外れていますがちょうどクリスマスのお話です。チェコ語では、主人公はクラバートですが、本のタイトルは「魔法使いの弟子」というのです。やはり魔法使い、黒魔術ですけれども魔法が出てくる水車小屋の話でございます。

### **チェコ語朗読**

画像はこれまでにしまして、ご質問をいただく前に、私はプロの朗読をする者ではないのですが、チェコ語の朗読をいたします。こちらはヨゼフ・ラダの“*Ku-ku!*” (クク) です。*Ku-ku* というのはカッコウです。カッコウの鳴き声ですが、ククというのです。その中の絵だけ見せますね。これはカッパです。この間の村上健太先生もお話になったと思いますが、チェコのおとぎ話にカッパというのは切っても切れない関係の登場人物、人物ではなく妖怪ですね。ここにすごくきれいに描かれていまして、必ず水の一滴が落ちているのですが、大体緑なのです。髪の毛が無造作に長いということで、こちらをちょっと朗読させていただきますと思います。チェコ語です。

・・・朗読・・・

という非常に短い詩ですけれども、変な日本語で通訳いたしますと、「お月様よ、輝いておくれ」、*mi šije nit* というのはちゃんと縫うことができるように、縫いたいけど暗いので、



šiju,šiju si botičky というのは、「今自分のために靴を縫っています、作っています」。do sucha i do vodičky というのは、「乾いた所でも水の中でも使えるような靴を作っているの、お月様光をおくれよ」、みたいなことなのです。よろしいでしょうか、短いのですがチェコ語はこんな感じでございまして、私はこの本を久しぶりに手にしているのですが、やはり子どもの頃を思い出します。これはちなみに悪魔です。ラダの絵も何とも言えない、もうパッと見たらすぐラダだと分かります。

あともう一冊、先ほどクルテク、モグラの話でその名前を挙げましたが、ズデニェク・ミレルの“*Kuřátko a obilí*”『ひよことむぎばたけ』です。またズデニェク・ミレルさんもやはりこう画風というのはすぐ分かります。こちらもまた読んでみますね。

・・・朗読・・・

韻と律がちゃんと合っていて、非常に子どもに聞かせるにはちょうど良い文で、また子どもは暗記してしまうのです。何度も聞かされると暗記して、私も昔覚えていたというきれいな本でございます。ありがとうございます。

もしご質問がありましたら何でも。私は全部知っているわけではないのですが、答えられる範囲でお答えしたいと思います。よろしく願いいたします。

## 質疑応答

出席者：ホリーさん、初めまして。ずっとお会いしたかったので今日はとても嬉しいです。

最近、雑誌などでチェコの絵本特集がありますが、その辺では見られないような貴重な資料を、面白く見させていただきました。質問なのですが、私は杉並区の阿佐ヶ谷という町で子ども文庫を開いているのです。自分の家の部屋を一つ、子どもの絵本の本棚を置いて無料で貸出しをしています。しかし、子どもたちが最近塾などで忙しくて、本を読まなくなると言う親御さんもいらっしゃいます。実際子どもさんも少なくなってきました。でも割と幼稚園に入る前の子どもは、来ると、自分で本を選ぶのが楽しいようで見ています。そういう子は大体、これだけ絵本が出ていても、ずっと昔のロングセラーの本、『しょうぼうじどうしゃじふた』、『ぐりとぐら』、日本の本だとその辺なのですが、チェコの子どもたちもやはりけっこう昔に出た本が人気なのかなと思います。たとえば親から子へ、とかおばあちゃんから、というように何代も読み継がれているベストセラー、チェコを代表する本がありましたら、教えていただきたいなあと思います。

ホリー氏：ありがとうございます。とても尊いことをなさっています。チェコを代表する本、一杯ありすぎて、親から子へというと、どちらかと言いますと、トゥルンカ、ミレルの本です。あと先ほどお話しした、ロシア人が書いていますが「ネズナーレック」です。親から継いだので、表紙はぼろぼろです。再版からいきますと、トゥルンカ、ミレル、それからペチシカ、あとは、女流作家のヘレナ・ズマトリ

一コヴァーです。ああいう本は各家庭にあると言っても過言ではないと思います。あとは、再版ということなのですが、今も、ご存じの方も多いかと思いますけど、チェコでは著作権問題が一杯あり、厳しくなっております。特にラダですとか、セコラ、トゥルンカもそうなのですが、再版が難しいという著書も少なくありません。一般書は頑張って再版の形で出しているわけなのですが。話が逸れたので申し訳ないですが、やはりどういうわけか昔に出た本の方がきれいです。全部がそうではないのですが、新しく出た本はやはり初版、50年代、60年代、70年代、初版の方が美しいです。多少人間の手が触っていてもやはり味があって良いと思います。たとえば色も、現代風にいろいろ表紙とか、装丁がされているのですが昔の方が良いです。話が全然違う方へ行ってしまうましたが、代表する本はトゥルンカ、ミレル、ズマートリーコヴァーが多くて、いまだにプラハに限らず、チェコはプラハだけではないので、各町に古本屋があります。そこへ行かれると、まだ安くて、人が使った本ですが、お買い求めいただけるのではないかと思います。よろしいでしょうか。話が逸れてしまってすみません。

出席者：どうも楽しいお話をいろいろとありがとうございました。二つほどありまして、ホリーさんの小さいときは共産主義の真っ只中でしたよね。その頃の子どもの読書環境と、自由になりました今の子どもの読書環境がどう変わったかを知りたいのと、もう一点は、ホリーさんは日本文化のお勉強をなさっておられますが、その時代に、何にご興味を持たれたのかということをお教えください。

ホリー氏：どちらも恥ずかしい話です。まず一つめということで、私が生まれたのは昭和47（1972）年なので、多分私にとってではなくて私の親、または同年代の人たちにとって一番大変な時代だったのではないかと思います。要するに1968年までは行き来していた国が突然ああいうこと…されてしまって、70年代の正常化ということですが、正常化時代が続きました本当に暗い時代だったかと思うのですが、家はプラハからちょっと離れていたせいか、別にプロパガンダ的に言わなければならないわけではなく、私は、不自由を余り感じたことはありません。というのはおそらく親が余計なことを言わなただけかと思うのです。読書関係につきましては、やはり昔からの本は家の本棚にありましたので、60年代、それから戦前のもは幸いにして家の祖父母の本棚に入っていましたので、余り気にはしなかったのです。もちろん、学校には6歳のときに行くわけですが、学校は完全にけしからん作家については、カットですね、教えるわけではないですが、やはり本棚に入っていました。それから学校が指定している本を読んで、読書日記をつけなければならなかったのですが、面白くない本は別に読む必要もありません。それは先輩から日記を借りてきて、書き写すということは私の場合だけではありません。時代は時代だったのですが、読みたくない本は読んでないです。児童書は一通り、実は良い本も出ていたと思います。自由な雰囲気は漂わせている

本ですと、行列ができてすぐ売れるのです。ちょっと欠点があったかもしれませんが、別に何か本に欠けていたということはないと思うのです。独断と偏見で申し訳ないです。1989年に自由になって、自由はどういうものかという、どんどんアメリカのアニメですとか、本がいろいろ入ってきます。そこで比較してしまうのです。必ずしも、外国のものが良いとは限らないということは私の世代には分かるのですが、今の若い子は分かりません。やはり今の4、5歳の子は当然にディズニーの映画を見ているし、日本のドラえもん、ピカチュウだってみんな自然と見ているのです。そういうものは、昔はないです。日本のアニメは『みつばちマーヤの冒険』でしょうか。私たちはドイツのものだと思っていましたので、日本に来て初めて、日本のものだと知りました。チェコの主題歌がありまして、日本と全く違って、チェコの国民的とも言える歌手であるカレル・ゴットという人が歌っています。今年67歳か68歳くらいでしょうか、四大歌手ともいわれています。要するにポップスですが、チェコとドイツの主題歌をドイツ語でその人が歌っているのです。だからドイツでも知られています。日本のアニメがなかった時代ですから、ドイツのものだと思っていました。今はもうお店に行ったら何でもある、何でもあるから飽きる、という現象が起きているかもしれません。それにしても、まだまだチェコ人はすごく本好きですから、別に若い子は本を読まなくなったということまでは、まだ行っていないかもしれません。しかし明日は分かりませんからね。

あと、日本の文化ですが本当に恥ずかしいです。ここにいらっしゃる方でご存じの方もいると思います（私はあの頃、いかにやせていた青年だったかということなのですが）。高校時代に日本を紹介する本を親から贈られて、それを読んで面白いなあと思いました。それから日本語をラジオとか映画で聞きまして、どういうわけか音に惚れてしまいました。すぐ日本語を勉強しまして、大学に入って、現在に至るといって本当に単純な話なのです。当時日本の八王子に住んでいた方と文通をしていまして、そのときに日本の古典芸能を紹介するビデオテープを送ってくださって、初めて歌舞伎を見てはまってしまいました。今は全然違うことをやっているのですが、まだ見に行ったりしています。ありがとうございます。

出席者：本当に楽しいお話をありがとうございました。私は公立の図書館に勤めて、児童サービス担当をしている者です。子どもたちに世界の国々の本を紹介したいなあと思っています。いろいろ企画を立て、去年はリンドグレーンさんの100周年ということでスウェーデンを紹介したりとか、今年はちょうど北京でオリンピックがあるので、中国とかモンゴル、台湾それから韓国とかそういう近くの国々の本を紹介したりしています。そういう中で私も去年、目黒区美術館でチェコのアニメーションの紹介があったときに、良いなあと思いました。是非この次はチェコの本を中心に紹介させていただきたいなあというふうに考えて、今回参加させて

いただいたわけです。うかがっていてすごく魅力がありました。ただ公立の図書館ということで、そして子どもも様々なものですから、そういう所で展示紹介をする場合にどういうことに注意をしたら良いでしょうか。そして、これは子どもたちに紹介してほしい、という本がありましたら、最初の質問のときにこういう人たちが今有名ですよ、という話をしてくださいましたので、そういうことも含めて、ちょっとでもアドバイスをいただけたらなあと思いますのでよろしく願いいたします。

ホリー氏：どう答えれば良いか途方に暮れています。ここに専門の方もいらっしゃいますし、私のような門外漢はお答えするべきではないと思うのですが。先ほども申し上げましたように、チェコに限って申し上げますと、児童書は山ほど大量にあります。まだ日本で紹介されていないものが一杯あるのです。繰り返しになるかとは思いますが、先ほどと同じくトゥルンカ、それからゼマンですとか、ミレル、ズマートリーコヴァー、ペチシカです。やはり彼らが作っている有名な本のほかに、まださほど知られてない本が一杯あります。それから彼ら以外で、今日紹介させていただきました、トワイアの児童文学もなかなか面白いのですが、トワイアはお金がかかります。これもそうですけどね、立派です。またはシュターフルですとか、向こうの古本屋に行きますと、まだまだ出ているのです。ですから、今回は亡き千野栄一先生のコレクションをご丁寧に扱っていただいて改めてお礼を申し上げたい次第です。東京ですとか日本に千野先生のほかにも、個人コレクターの方がかなりいらっしゃいますので、そういった方と協力されてはいかがでしょうか。私は図書館のお互いの関係が分からないのでこう申し上げました。大使館として、強気なことは言えませんが、もちろん何かお役に立つことがありましたら、是非ご連絡いただければ打ち合わせをし、ご興味の本を教えていただければ、ご相談に応じます。全然お返事になっていませんが申し訳ございません。よろしく願いいたします。

実は個人的に嬉しいことなのですが、日本ではようやくチェコの人気が出てきたのです。小野田澄子先生もそうですし、千野先生、井出弘子先生ですとかいろいろな方が翻訳されています。最近では国際子ども図書館で、去年は目黒区美術館で、いろいろな所でチェコ展が開催されるようになりましたのですごく嬉しいです。私の夢の一つなのですが、せつかく皆様の方からお力添えがありますので、それをもっと合わせて大きなものにできれば良いなあと思っています。別にチェコ大使館、チェコセンターだからではなくて、本当にチェコで生まれ育った者としてはすごく嬉しいですので、これを大事にしていきたいと思います。皆様どうぞよろしく願いいたします。

チェコセンターというのは、2006年の10月31日にオープンいたしまして、アジアで唯一のチェコセンターです。大使館の中に入っています。チェコ大使館は、

日本赤十字病院の近所にあります。日赤通りという所がありまして、ふだんですと大使館というのは、入ってはいけないというようなイメージが日本にはあるようです。うちの大使館はチェコセンターがありまして、平日のみなのですが（そこが大使館の変なところなのです）、朝の10時から午後の5時まで開いています。1階に観光部がありまして、チェコに行かれる方はそこで必要な情報を得られます。また2階に小さな閲覧室があり、そこにもいろいろとチェコの本、または購読している雑誌も一杯あります。それから、ビデオ、DVD、チェコのアニメですとかご覧いただけます。あとは私の事務所と下の事務所があります。もし皆さん、お近くにお越しの際は本当にお待ちしていますので、この間どこかで言ってしまったのですがチェコって面白いことがありますので、是非お立ち寄りいただければこのような者がお出迎えいたします。最後まで長い間どうもご静聴ありがとうございました。